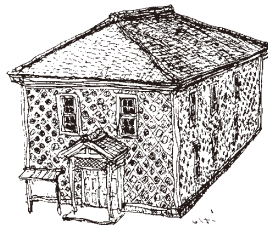


## 演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●経済学部長

いけだ ゆきひろ  
池田幸弘

# 意図せざる道を歩き続ける学徒たち

学問研究においても、何のために、という問いがしばしば聞かれる今日のごころです。大学における研究が、それを取り囲む世間からはいまひとつ理解しにくいということもありましよう。研究者が申請する各種公的資金の応募書類にも、期待される成果とその意義は必ず記すことを要請されています。この問いは果たして意味がある問いでしょうか。

どなたもご存知のように、現実の科学の歴史は、しかしながらることとなった様相を示しています。

研究のゴールというものは、しばしば見えにくいものです。そして、当初予定されている道筋はあるものの、しばしばその道は採用されないで終わります。先にいくと、そこで新しい視座、視野が開かれ、あらかじめ想定されていた道ではない道の存在に気づかされるからです。

そして、一応の成果らしきものが得られたときに、研究者は、出発点で描いていたゴールとは違う地点に立っていることを認識します。

研究の意義についてはどうでしょうか。すぐに臨床や創薬に

結びつかないような基礎医学の研究は意味がないでしょうか。あるいは、われわれには理解できないような抽象的な数理の研究は意味がないでしょうか。好事家の趣味に見えるような歴史家の事実の確認作業は意味がないでしょうか。答えは否です。ここでも、科学の歴史においては、当初はまったく意味不明であった研究が多くの実践的な知をもたらしたことが知られています。

研究は、しばしば驚きや好奇心から始まると言われます。その問い自体は、外にいる人間にとっては、途方もない問いのように見えることが少なくありません。

四月になると、キャンパスには新しい学生が満ち溢れ、活気がもたらされます。学生諸君、とくに新入生にとっては、目の前に提供されている講義が「何のため」のものであるかがわかりにくい時期があると思いますが、短兵急な成果を求めることなく、息長く勉学を続けて欲しいと願っています。わたくしどもも、常に新しい好奇心を持ちながら、学生とともに意図せざる道を歩み続けたいと考えています。